

「殺し殺されチキンレース」

—二稿—

2026/3/11

脚本 太郎

〈人物表〉

春野 紡

(14)

中学二年生

霧崎 宴

(14)

中学二年生

1. クソカス中学校・教室（昼）

机の配置や配膳台などから、給食中であることが分かる。

幾つかの机と椅子が倒れ、料理が床にぶちまけられている。

女子生徒が踞り、苦しんでいる。口から滴る地。

生徒たちは、オロオロする者が約半数。

残りの半数は、春野をリンチにしている。

春野、激しい暴力を振るわれながらも声を絞り出す。

春野 「ぼくじゃない、ぼくじゃないって」

一人の生徒のパンチが春野の顔にヒットし、鼻血が滴る。

春野 「こ、今回は違う、今回は本当にぼくじゃないんだって！」

春野、教室の隅の席に座る霧崎宴（14）を指差す。

霧崎、笑いを堪えている様子。

生徒たち、構わずに春野を暴行し続ける。

担任教師と数人の教師、淀川を介抱して連れていく。

2.

クソカス中学校・旧校舎・仮部室棟・万国説明書研究会部室（昼）

一般的な並びの教室。

霧崎、席について一人で熱心にドライヤーの説明書を読んでいる。**説明書の文字はアラビア語である。**

足音が近づいてくる。

春野、勢いよくドアを開け、入室。苛立った様子。

顔は晴れていて頬にガーゼが貼ってある。

霧崎、感心したように春野を見る。

霧崎 「律儀だね、昨日の今日でわざわざ部室来るなんて。当然のように学校休みなのに」

春野 「家にいたくないだけだよ。それよりさ、」

春野、早足で霧崎の机まで近付き、

バンと勢いよく机の天井に手を付く。

春野 「捌り殺すぞ」

霧崎、笑って、

霧崎 「単刀直入すぎでしょ」

春野、気持ちを落ち着けるように息を吐く。

春野 「あのさ」

霧崎 「うん」

春野 「世間に喧嘩売りまくって先に殺された方が負けゲームし
ようって話だったよね」

霧崎 「そうだよ。もう少しで勝てそうだった」

春野 「ルール守れよ」

霧崎 「何が？」

春野 「自分でやったって表明しないのは反則だろ」

霧崎 「そんなルールないし」

春野、屈辱に歯を食い縛り、

春野 「これじゃ実質二回ともぼくのターンじゃねえかよ」

霧崎 「皆何の疑いようもなく春野くんが犯人だって信じ込んで
たよね」

春野、前のめりになって声を荒げ、

春野 「信じられようもなく疑われたんだよ！」

悔しそうに悶える。

春野 「そっちだって腫れ物のくせに何でぼくばかり」

春野、ヒステリックな様子で子供のように地団太を
踏む。

春野 「絶対こいつの方がおかしいのに。いっつもぼくばかり
……ぼくばかりばかりぼくばかりぼくばかりぼくばかり
りぼくばかり」

霧崎、おかしそうに、

霧崎 「そりゃ直近で皆が可愛がって育ててた金魚の水槽に立ち
ションしたような人、誰だって犯人扱いするよ。客観的
にマジキチだもん」

春野 「マジキチはそっちだろ」

霧崎、きよとした顔。

春野 「学級委員の給食に裁縫針仕込んだらダメだろ」

霧崎、うんざりした様子で背凭れに身体を預けて、

霧崎 「マジレスかよつまんねー」

春野 「おい事件はマジに現実で起こってるんだぞ」

霧崎、嘲るように、

霧崎 「だから何」

春野 「アイツが死んだら人殺しになるんだぞ、現実問題」

霧崎 「良いよ別に。面白ければ」

春野 「良くないだろ。常識的に」

霧崎 「嘘でしょわたし今公衆の面前で金魚に立ちションする人に常識語られてる？」

春野 「逮捕されたっておかしくないんだぞ」

霧崎、溜息。

面倒くさそうな様子を隠さず、手元の説明書に視線を落とす。

霧崎 「ああ……うんうん」

春野 「もう14になるなら少年院行きだ。そしてきっと死刑だ」

霧崎 「うん。誕生日ありがとう」

春野 「は？」

霧崎 「え？」

春野 「……逮捕されて社会的に死ぬ上、死刑になって肉体的にも死ぬんだぞ？」

霧崎 「一石二鳥じゃん」

春野 「負の一石二鳥初めて聞いたな」

霧崎、説明書のページをめくり、気安い感じで、

霧崎 「まあ殺っちゃったものはしょうがないし前向きに考えようと思う」

春野 「何その考え方？ 反吐が出たよ」

霧崎 「事後なんだ」

春野 「本当に胸糞が悪い」

霧崎 「お大事に」

春野、呆れたように顔をしかめ、

溜息。

大仰に両手を広げて、

春野 「まるで欠落者の論理だ。常人に君は理解できないな」

霧崎、吹き出し、鼻で笑う。

春野、目を剥く。

霧崎 「(裏声で)まるで欠落者のロジックだ」

馬鹿笑い。

春野、それに反応して表情を歪ませ、霧崎を睨みつける。

春野 「何だよ」

霧崎 「出た特有の言い回し。今結構格好付けたでしょ？」

再び馬鹿笑い。

春野 「やめろよ。人の喋り方馬鹿にするのなんてダメだろ」

霧崎、さらにツボって馬鹿笑い。

春野、不快そうに舌打ち。

春野 「おい」

霧崎 「いや、喋り方とか言い回しだけじゃなくてさ、」

霧崎、笑いをこらえながら、

霧崎 「何回聞いても、人殺しの息子がモラリストぶってんのっ

て滑稽で滑稽で」

春野、歯が軋むほど食いしばり、

春野 「死ねよお前キモいんだよ！」

霧崎を思い切り蹴る。

霧崎、椅子から落ちて床に倒れる。

霧崎「痛った」

とは言うものの気にせずまだ笑っている。

春野、さらに憤り、霧崎に馬乗りになって、

春野 「うざいんだよゴミの癖に」

霧崎の肩をグーで殴る。

春野 「カスの癖によお」

頭を思いきり殴る。

春野 「馬鹿のくせによお。自分に知能があると思ひ込んでる猿

がよお。生きてんじゃねえよ」

霧崎、気にせず笑っている。

霧崎 「(裏声で)生きてんじゃねえよ」

春野、泣き声になりながらみっともなく寄声を発す。

霧崎、手を叩いてさらに激しく馬鹿笑いする。

春野、歯を食いしばりながら断続的に奇声を発し、

霧崎、動きを止め、

霧崎 「形勢不利な癖に言うじゃん」

振り返る。

霧崎 「面白いけど、このまま続けててもマンネリ化しそうだしさあ。それとも何か良いアイデアでもあるの？」

春野 「あるよ」

霧崎 「あるんかい」

霧崎、元の位置に戻る。

春野 「まず思ったのが、ぼくらの今やってるゲームは視野が狭い。そりゃマンネリ化するよなあって」

霧崎、感心した様子で、

霧崎 「確かに」

春野 「学校だけが世界じゃないのに限定する理由がないよね。クラスだけじゃなくて市内くらいには広げよう」

霧崎 「なるほど。それはそれで良いとして」

霧崎、席に座る。

霧崎 「何をすることも肝心だね？ 人殺しかけたんだし、次はいよいよ放火殺人くらいやらないと引っ込み付かなくな
い？」

春野 「いや、ターゲットをもっと大物にすれば良い」

霧崎 「どうと」

春野 「最近市内で起きてる連続殺人事件は知ってるでしょ？」

霧崎 「何それ知らない」

春野、露骨に顔を引きつらせて、

春野 「冗談だろ？ ちょっと世間知らずすぎるぞ」

霧崎 「ちよつとなら良いじゃん」

春野、呆れた様子で溜息。

霧崎、神妙な様子で、

霧崎 「分かった分かった。さすがにこの年齢で世間の出来事に無関心すぎることは反省しようと思うよ」

目を閉じて浅く深呼吸。

霧崎 「よし反省した。それで？」

春野 「その犯人に嫌がらせを仕掛けてひんしゆく買って、うちの学校に突撃させて皆殺しさせるゲームとかどう」

霧崎、眉を寄せ、何度も頷ぎ、

霧崎 「良いじゃん。……ゲームの趣旨変わってるけど」

春野 「まあ」

霧崎 「根に持ってる？」

春野、憎悪の表情。

春野 「さんっざん殴られたり蹴られたりしたんだ。徹底的にや

り返さないと気が済まない」

霧崎 「でもわたしに対するのとは違ってクラスの皆には直接手

出せないあたり君らしい腰抜けっぷりだね。常人エア

プくん」

春野、目を剥いて激高する。

3. クソカス中学校・旧校舎・外観（昼）

古びた旧校舎。

殴打の音が激しく響く。

春野の声 「それだとぼくが人殺しになっちまうじゃねえか！ イ

カレてんのかこの生ごみ女がよおおお」

霧崎の頭を床に叩き付ける音が響く。

4. 住宅街・道路（夜）

どこにでもある住宅街。

春野と霧崎、静かな夜の通りを並んで歩く。

霧崎、先ほどより傷だらけで、フラフラしている。

霧崎 「人間串刺し団子殺人事件、前編？」

春野 「いや前編とは言っていないけど」

霧崎 「人間串刺し団子って？」

春野 「被害者が常に複数人で、杭のようなもので貫かれて、団

子みたいに連結されてるから、そう呼ばれてるらしい」

霧崎、何度も瞬き。

霧崎「何それ、おもしろ」

二人、夜の闇の中に消えていく。

霧崎の声「ワクワクしてきた」

春野の声 「別に面白くはないしワクワクもしないけど」

霧崎の声 「またまたまた。嘘ばっかり」

終